

付篇1 武者塚古墳出土人骨について

聖マリアンナ医科大学 森 本 岩太郎

I. はじめに

昭和58年春、茨城県新治郡新治村にある武者塚古墳の玄室内から古墳時代後期に属する人骨6個体分が発見された。同古墳調査団から筆者のものとへこの人骨が届けられたので、以下はその所見である。

II. 人骨出土状況の概略

武者塚古墳の主体部は玄室と前室（副室）をもつ石室で、前室からは豊富な副葬品が出土した。玄室は前室の北側に隣接し、約 $2 \times 1.6m$ 大で、その長軸はほぼ南北方向である。玄室内には6個体分の人骨が認められ、そのうち5体は玄室の奥壁（北壁）に頭を向けた北頭位の伸展位で埋納されたと推定される、という。奥壁に向かって左手（西側）から順次に1～5号人骨と呼ぶことにすれば、1～2号人骨は埋納時の姿勢を保っているが、3～5号人骨は形状が不明で、追葬時に片付けられたか、または再葬された可能性もあるという。他の1体（6号人骨）は玄室の南東隅に頭蓋があるので、東壁に沿って南頭位伸展位で置かれたようにみえる。玄室内には布片などの有機物が点在し、2号人骨の頭部には美豆良（みづら）に結った頭毛と、口ひげ・頬ひげが残っていた。1号および3号人骨にも少量の頭毛があった。

これらの人骨の保存状態は極めて不良で、ほとんどが腐蝕により失われたり、崩れたりしている。残った人骨片を見ると、ほとんどが断片的であり、粉状を呈するものが多く、その残片の存在によって、かろうじて人骨の配列が読みとれる程度のものである。

III. 人骨の形状

人骨片はパラフィンをかけて、個体別に取り上げられている。上記のように保存状態が悪く、パラフィンを解融して人骨を取り出そうとしても、人骨とパラフィンとの境界があいまいで、うまくいかない。人骨残片は表面からも内側からも腐食が進んで薄くなり、原形を保っている部分がほとんど認められないで、人骨の形状をつかむことは非常に困難である。したがって、判明した範囲内でその所見を記すにとどめざるを得ない。

a. 第1号人骨（写真1）

出土図で見ると、頭蓋・椎骨・寛骨・両側の大腿骨と脛骨・足骨などの各人骨片が、おおよそ北

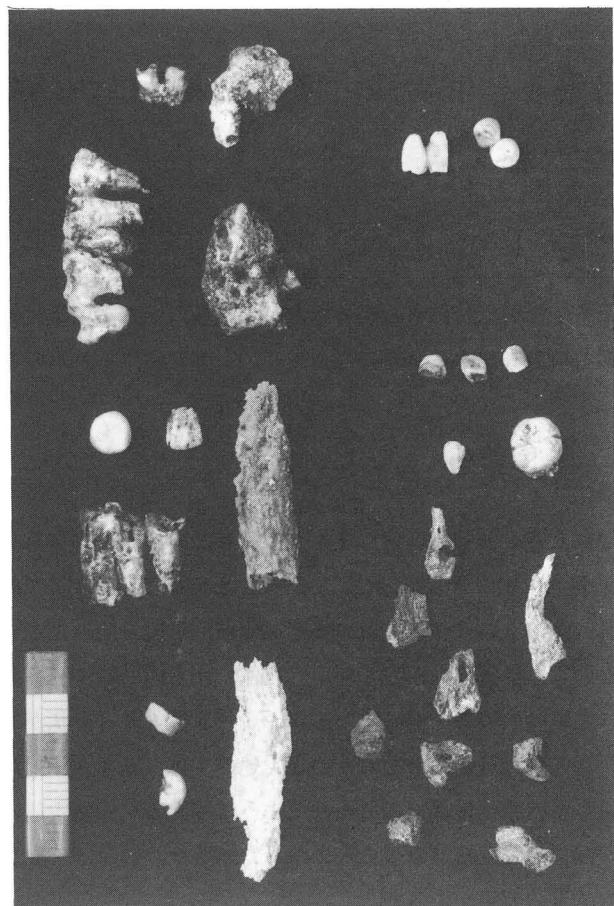


写真1 左列上から第1・2・4号また右列上から
第5・6号の各人骨片

頭位仰臥伸展位の解剖学的位置を自然に保っている。人骨は主として頭蓋とその周辺を中心に取り上げられているが、頭蓋片の部位がどこであるかを正確に同定できない。歯は大部が歯冠を欠くので断定は難しいが、歯の配列や歯根の形態などにより、残っているのは次の歯種（アラビア数字は永久歯の番号）であろうと思われる。

7 6		5 6 7 8
		3 4 5

これらの歯はかなり大きいので、成人男性のものと思われるが、年齢は不詳である。

b. 第2号人骨（写真1）

出土図で見ると、頭蓋・椎骨・寛骨・両側の上腕骨と前腕骨などの各片が、第1号人骨の場合と

同様に、北頭位仰臥伸展位を思わせる配列で解剖学的に自然に位置している。美豆良に結った頭毛・口ひげ・頬ひげがあったことから、現場では成人男性と推定されている個体である。前歯および後歯の破片が20個余り残っているが、そのうち歯種の同定できるものは次の5本である。

6 5 4	1
	8

ただし、6 5 4の3本は歯根だけしか残存しない。1の咬耗は舌側に斜めに片寄っているので、この固体の歯の咬合様式は鉗状咬合型である。1の咬耗度はBrocaの第2度に達しているが、8はまだほとんど咬耗を受けていないというところから、萌出途上にあったと考えられる。したがって、この男性の年齢は壮年期前半であると推定される。

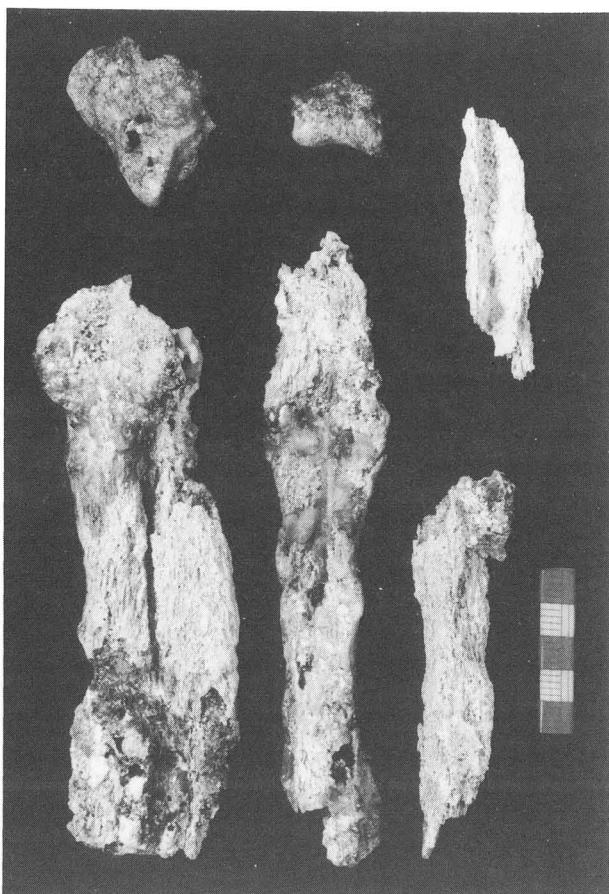


写真2 第3号人骨片

剖学的に不自然であるから、この個体人骨は二次的に動かされているかもしれない。この成人骨の性別および年齢は不詳である。

c. 第3号人骨（写真2）

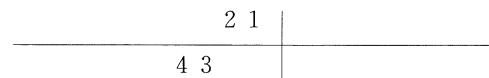
出土図で見ると、頭蓋片が20個近くあり、前頭骨や下顎骨が識別できたようである。しかし届けられた人骨ではそれらを確認することが難しく、わずかに左側頭骨の乳様突起らしい頭蓋片が認められるだけである。出土図では四肢骨が頭蓋に近いところにあり、肩甲骨と2本の大脛骨とが識別されているが、取り上げられたものでは、おそらく右肩甲棘の破片と思われる小骨片1個のほか、左右不詳の大脛骨体片（長さ約18cmおよび10cm）ならびに脛骨体かと思われる長骨骨幹片が並行して2本（長さはいずれも約18cm）存在した。頭蓋付近に大脛骨や脛骨のあるのは解

d. 第4号人骨（写真1）

出土図で見ると、下顎骨・脊柱・3本の長骨などがある。しかし、取り上げた人骨では咬耗度がBrocaの第2度に進んだ下顎大臼歯の歯冠片が2個と、約6cmの長さの長骨骨幹片が1個のほかは、同定のできない保存不良の小骨片が若干見られるだけである。歯の咬耗度からみると、この個体は壮年期後半～熟年期の年齢と思われるが、その性別は定かでない。

e. 第5号人骨（写真1）

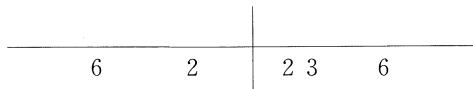
出土図では太い長骨1本と細い長骨2～3本などが認められるが、取り上げた人骨に長骨片は見当たらない。しかし、歯冠の割れた破片が30個近くあり、このうち歯種の判明するのは次の4本分である。



これらの歯ならびに歯種を確定できない下顎大臼歯片などの咬耗度はいずれもBrocaの第2度に進んでいるので、この個体の年齢も、第4号人骨と同様に、壮年期後半～熟年期と思われる。性別は不詳である。

f. 第6号人骨（写真1）

出土図で見ると、下顎骨のほか、5本の長骨が東壁に沿って縦に連なり、北端の指の骨などが描かれている。取り上げた人骨についてみると、まず不完全な下顎体の前部があり、次の歯5本が認められる。



ただしこれらはいずれも未萌出の歯であり、全く咬耗を受けていない。このことから、この個体は5歳前後の幼児と思われる。このほかにも歯の破片が幾つかあるが、同定は難しい。出土図で指骨などが描かれている部分の取り上げた骨をよく見ると、これらは小児の左手の手根骨（船状骨・月状骨・三角骨・大菱形骨・有頭骨）と中手骨4本分と数個の指骨片であることが分かる。

IV. まとめ

茨城県新治村武者塚古墳の玄室内から出土の古墳時代後期人骨は成人5体（男性2体と性別不詳3体）および幼児1体の計6個体分であると思われる。第2号人骨（壮年期前半の男性）の頭毛は美豆良（みづら）に結髪されていたという。